

第64号

柳井金魚ちようちんの歴史

①

柳井市社会教育指導員 松島幸夫

柳井の「金魚ちようちん」は、江戸時代の後期に津軽地方で生まれた「金魚ねぶた」が西廻り航路の海運によって運ばれて柳井津にもたらされ、現在の形に発展してきたものである。(注：津軽では「ねぶた」、青森では「ねぶた」と言う)

柳井の「金魚ちようちん」は、古くは灯火玩具の類であったために、専門職人の作品ではなく素人の庶民が暇を見つけては子供のために作ったもので、形態は作り手によって多少の違いがあった。しかも、飾っておく作品ではなく、毎年夏の行事に際してのみ、用いる玩具であったから、作品は永くは残らなかった。製作技法や製作者などについて、古文書ではなく口伝による情報なので、確たる歴史を把握することは難しい。口伝などを総合しながら、「金魚ちようちん」の歴史をまとめてみたい。

【①津軽藩(弘前藩)における金魚新品種「津軽錦」の誕生】

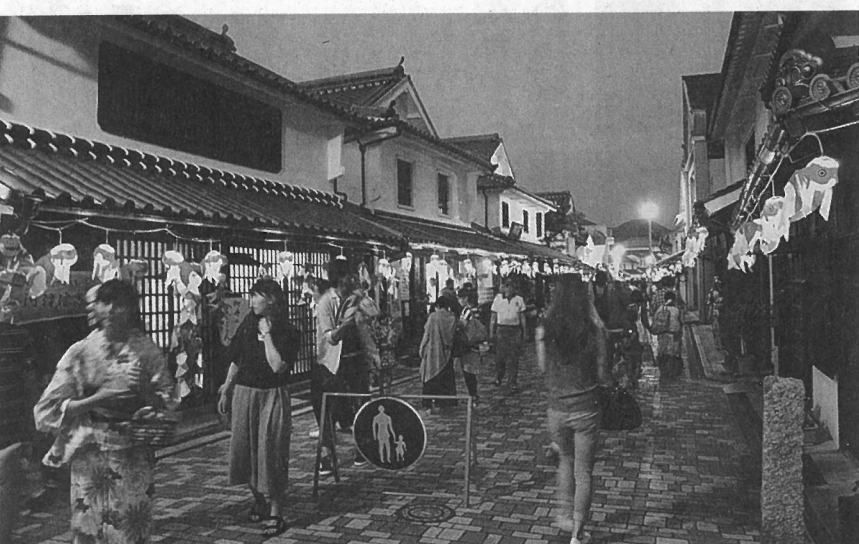
江戸時代が経過するにしたがって、幕府も各藩も財政が厳しくなり、支出を抑えるとともに収入を増やすために殖産振興に力を入れるようになる。飢饉の被害が大きかった津軽藩では、新田開発をすすめるながら、漆や楮の栽培あるいは陶器製作などを奨励した。また、他所から各種の魚を取り寄せて養殖も行っている。そうした折、上方から「金魚」を移入して養殖をし、品種改良を行って、成魚を他藩へ売却して財政再建の一助にした。考えたようである。藩主の津軽信寧は明和年間(1764~1772年)に小和田覚兵衛に京都から金魚を持ち帰らせて、斎藤勘蔵と柿崎何某に命じて、金魚の飼育を始めていた。しかし、利益を生むまでには至らなかった。やがて文化年間(1804~1818年)になると、庶民にも金魚の飼育が許され、急速に広まっていく。こうした藩が主導する改良努力の結果、金魚の新品種が生まれた。「津軽錦」である。従来からの「和金」に比して新たな「津軽錦」の特徴は、背ビレがなく、尾ビレが長く、赤い発色が遅いなどの個性を備えている。郷土津軽にしか存在しない「津軽錦」に、津軽の人々は愛着をもち、誇りとした。その思いを込めて、灯火玩具の「金魚ねぶた」が

の公立単とされた。昨11月の全国選抜県予選で、山縣君は60キロ級、蔵中君は65キロ級で優勝。125キロ級は米屋君以外に出場選手がいなかったことから、この階級での優勝となつた。

全カ開作された。個人戦は各県の1位優勝者が全国に出場することになった。一方、団体戦で県2位だった柳井学園は、中国5県の抽選で外れ、不出場となった。

待着とる。マンスタイルでの日本一をめざし、2024年のパリ五輪に出場することが最大の夢です」と目を輝かせる。幼少時から中学3年までは柔道一筋だった

に光市の冠山で初めて開催し、2回目柳井市。今回の展示、土佐錦や東錦、錦などの「金魚種類以上、極龍雲州三色など」が10種類、前焼(鎌倉、室国の高麗焼(李茶碗、花瓶など)美術)が30点、風展入選樹や栽登録樹などのが15席となつて、また、田布施



生み出される。「金魚ねぶた」と称するが大型の山車ではなく、「ちようちん」の大きさである。ちなみに、「ねぶた」とは弘前での呼称で、青森では「ねぶた」、五所川原では「立ちねぶた」と呼ぶ。

柳井市では、績が優秀であふかわらず、経済由で修学が困難必要な資金を無貸し付ける「ふ学生応援奨学」学生を募集して募集内容は次

学業資金

柳井市

・新品種の「津軽錦」の誕生について、上に記した財政再建説の他にも説がある。弘前藩の藩主は津軽氏で、江戸時代を通して国替えはなかった。大名が存続していくためには、幕府や親藩へ献上品を贈っておく必要があった。鷹や白馬を贈ることもあった。鷹や白馬だけでなく、新たな献上品を贈る必要性から金魚の品種改良を明和年間に行つたとの説である。(写真は白壁の町並みに電飾されている金魚ちようちん。毎年8月に開催される柳井金魚ちようちん祭りより)

柳井市では、績が優秀であふかわらず、経済由で修学が困難必要な資金を無貸し付ける「ふ学生応援奨学」学生を募集して募集内容は次